ほ～おん通信 NO.70 2016 冬号
年四回 不定期発行
発行：鯖江市杉本町 31-42　報恩寺
編集：林　暁　T/F 0778-51-6064
e-mail　satoru@utopia.ocn.ne.jp

おうちのみんなで読んでね

南無阿弥陀仏の　こころわするな

明けまして、おめでとうございます。

私たちの子供の頃は、生まれるとすぐ１歳と数えました。そしてお正月が来るたびに歳を一つずつ加えることになっていました。いわゆる「数え年」という習慣が生きていました。

昨年の報恩講、和やかにお斎をいただく

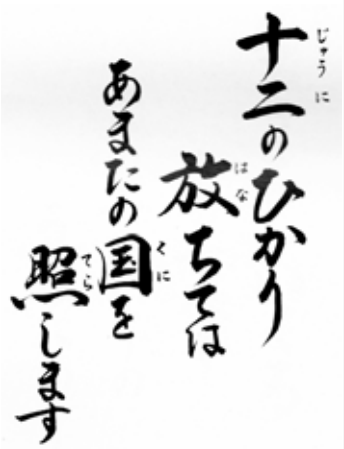
ですからお正月に晴れ着を着て、嬉しい顔をしている子供たちに会うと、「歳はいくつになった？」と声をかけたものでした。子供たちは「７つになったの」「５つ」などと誇らしげに答えたものでした。子供心にも、お正月にが来て歳が一つ増えたことが無性に嬉しく、お正月が来るのを楽しみにしていたものでした。

しかし、年齢を「満」で数えるようになってからは、「今度の誕生日が来ると７つになるの」とか言うようになりました。お正月と年齢の関係が亡くなってからもう半世紀余りでしょうか。ですから、80 歳をはるかに越えてしまった私などは別に変わったことはないのですが、それでもお正月になるとなぜか身もこ心も改まって、元日の「修正会」を勤めて清々しい思いになるから不思議なものです。やはり、年が改まると「一年の計は元旦にあり」というように、今年はどんな年にしようかと、一年の抱負を立てたくなるものです。

蓮如上人は「あらたまの年の初めは祝うとも　南無阿弥陀仏のこころわするな」と言われます。お互いに年の初めの祝いを述べて新年を迎えますが、そのとき何よりも「南無阿弥陀仏のこころ」わすれず、「仏法をあるじとし、世間を客人（まろうど）」として生きていくことを、我が身に言い聞かせたいものであります。（孝雄　出典　仏教家庭学校）

本年もどうぞ宜しくお願い致します。▼安保法制に原発輸出と再稼働、ＴＰＰなどに揺れた一年。今後十数年の方向が決まってしまったかもしれません。▼昨年十月、クリスタルボウル演奏会。天から降りてくるような不思議な音空間に、参加の方はゆったりくつろいでいただきました。次回もお楽しみに！（S）

法語カレンダー⑤（和訳正信偈　第四首）



＊今年の法語（真宗教団連合カレンダー）は、昭和四八年の親鸞聖人ご誕生八百年に定められた共通勤行「和訳正信偈」から。本願寺派でも昭和二十三年、正信偈を七五調で意訳した「しんじんのうた」が制定。親しまれています。

◆正信偈の偈頌では「普放無量無辺光・・・超日月光照塵刹」までの五句に相当するのが、「十二のひかり」の部分です。仏説無量寿経には、阿弥陀如来の別名として「十二光仏」が説かれ、親鸞聖人は阿弥陀様がどういうはたらきの仏様であるか、十二の光の機能で示されました。

限りなく（無量光）　**どこまでも広がり**（無辺光）
何ものにも遮られず（無碍光）　**並ぶものなく**（無対光）
いきいきと（光炎王）　**清らかに**（清浄光）
よろこびを与え（歓喜光）　**惑いを除き**（智慧光）
常に（不断光）　**私の想像も表現も及ばず**（難思光・無称光）
現実の光が及ばぬところをも照らし出す（超日月光）

阿弥陀様が、無量の光（智慧）と無量のいのち（慈悲）をもってはたらかれるのは、迷いや苦の中で本願の教えも悟りも知らず、目先の些事や自分の感情ばかりとらわれる衆生が、私を始め無数にいるからです。

もし自分の意に適わなかったり、和を乱すような人がいても、叱責も排除もせず、その思いと存在をきちんと認めることから対処していく。そのような、人をそのまま活かす智慧としてのひかり。その中で私も今、生かされています。（引用「心に響くことば」「月々のことば」）

教えて、お坊さん ⑤「どうして、なんまんだぶって言うんですか？」・・・

「おお、いいしつもんだね～。それは、『あみださん、いつもありがとう』っていう意味なんだよ。目には見えないけど、ぼくたちがもし悪いことをしたら悲しむし、とてもがんばったのにだれにもほめられなくてもよろこんでくれる仏さまです。いつでもどこでもぜったいに味方になってくれるっていうのは、ほかにだれもマネはできません。だから声に出して、あみださんにおれいを言うんだよ」～不思議そうに聞く小学一年生に

「たとえば、君は毎日きちんとご飯が食べられたり、食べたご飯で体はうごいてくれるよね。考えたら自分の力じゃない。何か自分自身の力でないたくさんのものが働いてくれて、みんな生きていられる。その働きそれぞれ自体には 100% 嘘はありません。全て、いのちをよりよく生かそうとしてくれている。そんな大きな、間違いのないのが仏さまです。そう感じて、ああおかげさまで！と声に出すんです」～少し生意気そうな中学生に

「いのちっていつ終わるかわからないし、なぜ生まれたのか自分では知らないよね。それでみんな迷ったり怖くなる。どうして自分はこんな人生だろうって行き詰まってしまう。そんなとき、分け隔てなく、いのち丸ごとお任せできるような救いが人間には必要なんだ。それが誰もが追い求めずにはいられない真実です。その働きが言葉になったとき、南無阿弥陀仏と言います。意味は判らなくてもこの出来事は受け取るしか手はない。そう諦めたらハッキリ目が覚めるんです。仏さんはいつもそう願ってるよ。～悩み尽きない高校生に

“45 歳も過ぎたら人生の再編集” … それは身につけた古いものを脱ぎ捨てたり、叶わなかった夢を精算して、人生後半に向かってやるべきことを再構築していこうという文脈である。

仏法的、再編集ワーク②
〈ストリーミング ～私の中に流れこんだもの〉

◆人生はしばしば流れゆく河に例えられる。小さな流れがいくつも合流して、一本の河となり、様々な屈折を経ながら時には暴れ、また田畑を潤しついには海へとたどり着く。

大きな紙を使って、源流から海までの流れを描いてみよう。まず、二つの源流である父と母のラインを、やや端っこに置き、そこからどんなものを受け継いできたのか、大事なものを言葉にしてそのあたりに書き込む。

私という河の中にはたくさんのものが流れ込んできているので、そのうちの大切なものは支流を引っ張って、キーワードを書き入れる。生まれてから今日に至るまでのいろんな時期に影響を受けたもの、惚れ込んだもの、没頭したもの、大きな事件とかを書き込んでいく。ラインが下流に向かって太くなり、私の地下水脈のような「精神形成史」というべきものが浮かび上がってくる。

私には両親の影響があり、先生や先輩、友人や、恋した人、連れ合い、子供。本や音楽、映画や演劇、バイトや会社、習い事などの様々な経験と出会いが私の精神性を作ってきた。それらはキーワードは、決して好ましいものばかりでもないだろうし、一つの言葉にはくくれないものもある。しかし認識とは不思議なもので、思い返すうちその意味合いが変わってくるものだ。

「私は透明な幽霊の集合体」と宮沢賢治は言った。賢治の中にはどんな魂が生きていると意識されていたのか。最愛の妹トシをはじめ、様々な過去も同時代の偉人も生きていたはずである。

私の考えや振る舞いだと思い込んできたものが、何から来たものだろうと振り返るとき、その影響から私が自分自身をどんな風に編集してきたのか明らかになってくる。そして、私の深い部分にはあの人やあの出来事からこんな影響があったのだと気がつくことで、自己調和が深まっていく。

まるで否応なしに、半ば必然のように私の中に流れ込み、息づいているものへの愛おしさ、かけがえのなさ。固定した私という自我も絶対ではなく、少し離れた目で感じられる。

ただしこれは自己認識の入り口にしか過ぎない。図には現しにくいが、私に影響をもたらした人物にも、私がそのキーワードを受け取るような影響を何かから受けている。

それは、それぞれの父母や先生の価値観であったり、もしかすると大戦など社会の大きな転換から発したもの。あるいは日本文化の底流のようなものが、濃淡こそあれ私の気質やマインドのどこかに入り込んできているかもしれない。ただし、そのへん私たちは大抵無自覚である。

さて仏法、あるいは宗教はどのくらいの太さで私の中に流れているだろうか。（参考：「ライフナビゲーションツール」／津村喬）

＊補足：成人の身体重量の約 7 割は水分だという（赤ちゃんはみずみずしく、年をとれば失われていく）。とすれば私の体のおそよ半分以上は食物によって地元の水系から供給され、あと何割かは全国各地や世界各地の水が流れていると言える。そして私の体をいっとき構成した水は再び自然界に排出され、川や海、雲となって、大地や生き物の一部へと、壮大に循環しているのだ。

「朝ドラが教える、大切な心遣い」

◆私には毎日、「今日一日の楽しみ」があります。それはNHK朝の連続テレビ小説の放送です。朝の準備をしながら片手間に見る．．というのではなく、録画予約をしてテレビの前にしっかり座り、じっくり見ます。

今は、ご存知「あさがきた」が放映されていて、物語のテンポの良さ、真剣なところとユーモアたっぷりな場面の緩急、そしてハッとするセリフに感動しながら楽しんでいます。

主人公のあさをはじめ、いろんな登場人物がいるのですが、中でもあさの姑「よの」さんが好きな人物です。乙女心を忘れない可愛らしい方なのですが、あさの仕事優先の生き方にやきもきするというお姑さんです（明治初期のドラマです）。

あるとき、いい母親になりたいが仕事もしたいと悩むあさに、よのは「あんたは欲張りや」と言い放ちます。私は､「あーあ、ついにあさが怒られるよ～」とハラハラしましたが、次によのがあさにかけた言葉は意外でした。

「世間から後ろ指を指されても我が子に背中を見せるつもりで気張らねばなりません。覚悟決めなあかん。子供の面倒を見るものは他にもいる。今更いいお母ちゃんにならなくてもよい」と後押しをするのです。

怒ったり注意したりはすぐできるもの。押さえるべきことはしっかり押さえて、なおかつ勇気付けたり、やる気を起こさせ後押しができる、よのさんの器の大きな態度。

感動と同時に、職場で私のふるまいを反省もさせられました。たった15分のドラマなのですが、私にとって大切なことを教えてくれる番組なのです。(C)

＊ドラマのモデルは大阪・船場の加島屋。真宗門徒のための生命保険会社を再建し、龍谷大の前身に多大な支援をした有力な門徒だそうです。シナリオでは、ご主人が逝去したのち、よのの態度が協力的になります。寂しいけど、家の中で年配者ともなれば、いつまでも不平を言ったり自分の思いに執着しては下の者に示しがつきません。一皮向けたのですね。(s)

パリの同時多発テロに世界がどよめいた。しかしふだん中東やアフリカで軍事的暴力によって失われる命にどれだけ私たちは弔意を示してきただろうか。フランスはじめ欧米がこれまで彼の地で何をしてきたのか、今回の結果を生み出した因と縁をたどろうとすれば、どのくらいまで遡らねばならないのだろう。差別と憎悪、報復が生まれる背景について、もう少し関心を払わずにいられない。

人間が起こした問題なのに、神仏に解決してほしいと祈る。それは筋違いだ。神や仏や政府に祈るんじゃなくて、家族で、社会で平和へと働きかけること。

ダライ・ラマ十四

今年度行事予定

・お年頭：1月2日（土）終日　・永代経：3月20日（日）昼3時
・七日盆：8月7日（日）終日　・盆　会：8月15日（月）終日
・報恩講：9月22日（祝木）昼3時、夜7時

どうぞお参りください